

大分県東国東郡姫島村方言における 56年間の言語変化

—同一話者への追跡調査結果から—

松田美香 塩川奈々美

【要 旨】

おおいたけんひがしくにさきぐんひめしまむら
大分県東国東郡姫島村で、同一人に3度（1961年・1981年・2017年）の方言調査を行った。その結果、1961年（少年層時）の回答と2017年の回答の一致率は約46%だった。また、1961年当時の老年層との回答の一致率は、1961年時の51.8%から2017年では35.6%に低下した。1961年から1981年までの変化は、それ以降の36年間よりも急激だった。変化の方向は共通語化だけでなく、1961年当時の老年層語彙への回帰も見られた。この話者が中学生から2017年までの56年間で、共通語化だけでなく、上の世代や村外の大分方言を習得したことが明らかになった。

【キーワード】

姫島村方言、『瀬戸内海言語図巻』、追跡調査、見かけの言語変化、共通語化

1. 研究の目的

本研究は、瀬戸内海最西の島である大分県の姫島（姫島村全域）の方言を扱う。最初の調査から20年後と56年後に行われた追跡調査の結果を比べ、その変化率と変化の方向性を明らかにしたい。また、本研究では同一人の56年間に起きた変化を見られるため、同時期に行った調査で老年層と少年層（中学生）の結果を比較して「見かけの言語変化」とらえようとしたものと、「実際の経年変化」の一致度を検証することが可能である。世代差調査によって予測している変化と実際のものとの程度異なるかを明らかにすることで、方言地理学や言語習得論の研究に少しでも役立てば幸いである。

2. 姫島村の概要（方言の特徴を含む）

姫島村方言は、大分県の方言区画の東部方言域にある（図1参照）。東部方言域は地理的環境から、東北海岸部（東部A）と東南海岸部（東部B）に分けられている。姫島村方言は東部A方言に属する¹。本方言の音声的特徴としては、接続助詞のテがチ、デがジと発音され、セがシェ、ゼがジェ、ツがトゥ（[tu]）、ズがドゥ（[du]）で発音されるなどがあるが、これらは姫島村方言を含め大分方言の高年層全般の特徴である。東部方言の特徴的なものとして、連母音の融合ではオイがエー（「白い」がシレー）になり、大分中部方言のイー（「白い」がシリー）になるのとは

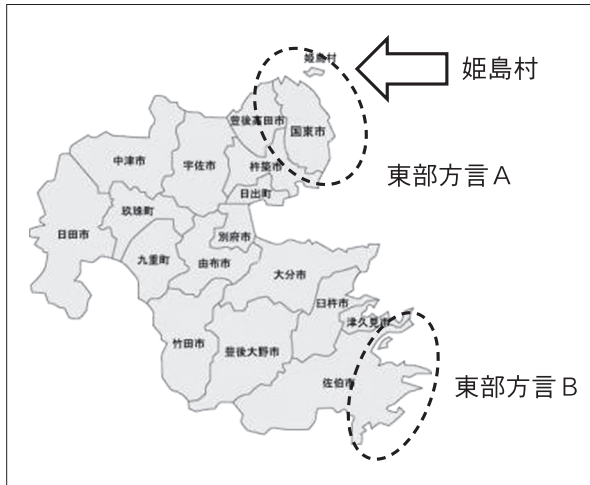


図1 姫島村の位置と方言区画 大分県HPより



図2 姫島村と国東半島 姫島村HPより

異なっている。また、格助詞の「が」がンとなる。文法では、動詞の二段活用が盛んである。語彙では、第一人称がアシ、第二人称がオンシなど、大分県その他域と大きく異なるところもあるが、大分県北部方言の特徴と重なるところもあり、原因・理由の「から」にホデ（それで）を使い、係り結びの変化形がヨーコー（良くこそ）などとして残っている。

姫島村の2015年の総人口は1,991人で減少傾向にある。人口密度は285.2人/km²。漁業就労者は250人、農業就労者は73人である（2015年）。

3. LAS調査（先行研究）とLAS科研調査について

LASとは、“The Linguistic Atlas of the Seto Inland Sea”の略であり、藤原与一・広島方言研究所（1974）『瀬戸内海言語図巻』上巻・下巻を指す。1960～1965年に瀬戸内海島嶼部と本州・四国・九州の内海沿岸部の合計925地点（うち、沿岸地点227）の広域調査によって作成された地図である²。このLAS調査では、瀬戸内海という内海を利用した言語の伝播の存在やしきみを厳密に調べるために「均質資料」が求められた。調査対象者を当時60代女性と中学生女性の同地点の2世代としたこと、男性ではなく女性のみとしたことに特徴があり、あくまでもその土地への伝播を観察しようとする、瀬戸内海地域独自の条件がとられた³。その後、広島大学方言研究会（1981）や藤原与一・室山敏昭（1999）など、引き続き瀬戸内海の島々や沿岸地域を対象とする研究が進められてきた。

本調査研究は、先行研究の調査から約50年後の追跡調査および瀬戸内海沿岸地域の音声方言地図作成のための科学研究費助成事業による調査研究（以降はLAS科研調査と呼ぶ）の一部として行ったものである。

4. 調査の概要

4.1. 調査年月日

第1回目調査：2017年8月28日実施（話者A）

第2回目調査：2018年3月1日実施（話者B⁴）

4.2. 調査対象者

話者A：56年前の話者（女性1947年生まれ・島西部の西浦地区）

なお、適宜以下の話者の結果も使う。

話者B：はえぬき話者（女性1948年生まれ・島西部の西浦地区）

4.3. 調査場所

大分県東国東郡姫島村 姫島中央公民館（城山若者宿）内

4.4. 調査の方法

臨地調査による調査票を用いた調査を行った。調査場面では被調査者に調査票を見せず、調査者が質問文を読み上げて答えてもらう方法で行った。質問の一部は、絵カード（先行研究と同一の物）を見せた。調査の全体を、調査者の持つ録音機で録音した。原則として、話者が現在使用している語を答えてもらったが、こちらであらかじめ調べた語で誘導することもあった。

5. 調査結果 —実際と見かけ上の変化率の比較—

話者Aの56年前と今回の比較の結果、一致率は約46%、変化率は約54%であった。結果一覧は、稿末の別表を参照していただきたい。

以下、いくつかの注意すべき点を述べる。

- ・先行研究では240項目の質問の調査票を、LAS科研調査検討会を経て146項目まで削減したものを用了。枝番により実際の調査項目数は151になったが、特定の文末詞等の使用の有無のみを尋ねるものがあり、集計時にはその一群を除いて集計した。今回の最終的な比較対象は139項目となった（別表の質問番号は調査票のものである）。
- ・56年前の西浦地区調査では2人の中学生の回答（記号）があるのだが、地図には個人の区別がなく、2人のうちのどちらが回答したかは判別不明である。話者Aの回答は、2つの記号のうちのどちらであるかわからない。そのため、記号が異なる場合は「併用語」として処理することにした。したがって、変化率は純粋な話者Aのものとは言い切れず、話者Aと当時のもう一人の話者の回答を合わせたものということになる。
- ・枝番（1-①、1-②のような質問番号の振り方）の質問については、「…と言いますか」の次に「では、△△△のことを何と言いますか」というものがほとんどであるため、言わないという回答のほうは極力省くようにした。ただし、実際の使用語形を回答している場合もあり、それは比較対象として残すことにした。

5.1. 変化率の出し方

変化率を出すために、1961年と2017年の回答に変化があった場合は1点を与え、どちらかに併用語形があり、一致はどちらか一語形のみであった場合、0.5点を与えることにした。たとえば、「シェンデモ（しないでも）：1961年」と「センデモ：1981年」の場合は1点を与えたが、「テ（手）：1981年」と「テー：2017年」の場合は0点（変化なし）とした。調査者によって長音の聴き取りに差が出ることが多いため、「長音のみの差は変化と見なさない」という判断による。また、「ヘソクリ：1961年」と「ヘソクリ、ナイショギン：1981年」のような、一方が併用語形（片方の形が異なる）の場合は0.5点を与えることにした。

5.2. 56年前の回答からの変化率と保存率

前述の点に注意し、LAS中学生回答から「変化」したものに1点、「併用語が変化」したものに0.5点を与え、139項目のうちの何パーセントが変化しているかを出した(表1)。

表1 1961年と2017年の結果の変化語数と変化率(話者A)

	変化語数 (1点)	併用語が変化 (0.5点)	変化率
話者A 1961年と2017年	60	$30 \times 0.5 = 15$	$60 + 15 = 75$ $75 / 139 \approx 54 (\%)$

変化率が約54%なので、一致率(保存率)は約46%である。不変化だった語(別表中の太字)の中には、現在の共通語形もあるが、方言語形も少なくない点が注目される。

5.3. 見かけ上の変化率との比較

1961年には少年層と同時に当時の老年層にも同じ項目で調査しているので、以下では、その結果との比較を行う(表2)。

表2 実際の変化率と見かけ上の変化率(2017年現在と1961年時点)

	変化語数 (1点)	併用語が変化 (0.5点)	変化の割合 (変化率)
実際の変化 (話者A本人)	60	$30 \times 0.5 = 15$	$60 + 15 = 75$ $75 / 139 \approx 54 (\%)$
1961年の少年層(話者A) と老年層	54	$24 \times 0.5 = 12$	$54 + 12 = 66$ $66 / 139 \approx 48 (\%)$

表2を見ると、実際の変化率(上段)が見かけ上の変化率(下段)を約6%上回る結果となった。

6. 変化の速度と方向性

6.1. 変化の速度 — 1981年の結果との比較 —

広島大学方言研究会(1981)『大分県姫島方言の研究—第二部文法・語彙 方言の動態』には、LASから20年後の1981年に行った追跡調査の結果が詳細に記されている。その時の姫島村西浦地区の話者も、話者Aであった。したがって、この資料により1961年から1981年間の変化も知ることができる。そこで表1と同様の計算をした結果、1961年から1981年までの変化率は約52%、1981年から2017年までの変化率は約53%だった。これを年平均の変化語として比べると、1961~1981年は3.6語/年で最も多い。1981~2017年は2.1語、1961~2017年では1.3語/年となる(表3)。

ここからわかるように、最も言語変化があったのは1961~1981年の間である。話者Aが15歳から35歳の時期に、比較的大きく使用語彙が変化したことがわかる。ところで、1981年からの変化語数も決して少なくないのに、56年間の変化率は1961~1981年とほぼ同程度という結果だった。その理由は「使用語の逆戻り」現象である。変化した語の移り変わりをを見ると、1981年には変化した57語(併用語が変化した分も合わせると88語)のうち、27語(28項目)は少年層

表3 1961～2017年の変化（平均変化語数/年）

	話者A（LAS当時中学生話者）1961年～2017年		56年間
	1961年～1981年 20年間	1981年～2017年 36年間	
変化した （1点）	57	56	60
併用語形に変化があった （0.5点）	31	36	30
合計点数	72.5	74	75
変化率	72.5 / 139 ≒ 52.1%	74 / 139 ≒ 53.2%	75 / 139 ≒ 53.9%
平均変化語数/年	3.6語/年	2.1語/年	1.3語/年

の使用語に戻っている（別表参照）。

6.2. 共通語への変化

1961年～1981年に変化したのは、語数で言えば1点の57語と0.5点の31語を合わせた88語である（表4）。そのうち別表に（共）を付した共通語化した語と見られるのは19語だった。同様に1981年～2017年を見ると92語のうち35語だった。1981年から2017年の間に共通語化した語が多かったことがわかる。共通語化した語群を見ると野菜名などがやや多い印象も受けるが、助詞・助動詞類でも共通語化しているものもあり、これらのデータから規則や傾向をつかむことは難しい。

表4 1961年～1981年と1981年～2017年の共通語化率

	1961年～1981年	1981年～2017年
共通語化数/変化語数	19語/88語	35語/92語
共通語化の割合	≒21.6%	≒38.0%
平均共通語化数/年	0.95語/年	0.97語/年

6.3. 老年層の語彙への変化

次に、変化した語が1961年当時の老年層話者の語（以下、老年層語彙）と一致するものを探し、変化語中の割合を出した（表5）。1981年までに88語が変化した、そのうちの16語は1961年の老年層の語と一致した。さらに1981年と2017年の間に92語が変化した、そのうちの10語は1961年の老年層の語と一致した。表6は、1961年の老年層語彙へ変化した項目を一覧表にしたものである。表中の語に下線を施してあるのは、変化語と老年層語が一致したものである。ところで、話者Aが1961年の少年層であった時の老年層との回答の一致は、72語（一致率51.8%）であった。2017年の話者Aの結果と1961年老年層との一致は49.5語（一致率35.6%）で数値的には

表5 変化の方向性：先行研究（『瀬戸内海言語図巻』）の老年層語彙化率

	1961年～1981年	1981年～2017年
先行研究（LAS）の老年層の語彙 との一致数/変化した語彙数	16語/88語	10語/92語
平均老年層語彙化数/年	≒18.2%	≒0.11%
	0.80語/年	0.28語/年

表6 老年層語彙への変化 (1~16:1981年の変化、17~26:2017年の変化)

番号	質問項目	1961年 少年層=話者A	1981年 話者A	2017年 話者A	1961年 老年層
1	おしろい	N.A.	<u>オシロイ</u>	オシロイ	<u>オシロイ</u>
2	うらやましい	ハガイー	<u>イカミー</u>	ウラヤマシー	<u>イカミー</u>
3	飲んだ	ノンダ	<u>ノーダ、ノンダ</u>	言う(ノーダ)、 ノンダ(年上)	<u>ノーダ</u>
4	南瓜	カボチャ	<u>ボーブラ</u>	カボチャ、 ボーブラ	<u>ボーブラ</u>
5	とうもろこし	トモロコシ	<u>トーキビ、 トモロコシ</u>	トモロコシ	<u>トーキビ</u>
6	便所	ベンジョ	<u>ベンジョ、 シェンチン</u>	トイレ、ベンジョ、 セッチン	<u>ベンジョ、 シェンチン</u>
7	出して	ダシチョクレ	<u>デーチ</u>	ダシテクレ、 ダシチョクレ	<u>ダヒチェックター、 デーチクテター</u>
8	まないた	バン	<u>キリバン、 マナイタ</u>	マナイタ、バン	<u>バン、キリバン</u>
9	嫁が勝手に里に 帰ること	N.A.	<u>サラカムル</u>	サトガエリスル	<u>サラカムル</u>
10	分家	N.A.	<u>ワカサレ</u>	インキョ	<u>ワカサレ</u>
11	やっと	ヨーヤク	<u>ヤット、 ズンドコンド</u>	ヨーヤク、 ヨーヨー	<u>ヤット、 エンヤラヤット</u>
12	船首	サキ	<u>オモテ</u>	オモテ	<u>オモテ</u>
13	船尾	ウシロ	<u>トモ</u>	トモ	<u>トモ</u>
14	落ちる	オツル、オツン	<u>アエタ⁵</u>	アユル	<u>アユル、オツル</u>
15	もうちょっとで 落ちよった	オチオッタ	<u>言わない</u>	アー モーチョッ トデ オチョッタ	<u>言わない</u>
16	突然に	キューニ	<u>ダマシ</u>	ポクト	<u>ダマシー</u>
17	雷	カミナリ	カミナリ	<u>ヨーダチ、カミナリ</u>	<u>ヨーダチ</u>
18	怠け者	ヤクナシ、 ホネクサリ、 ドボネクサリ	ドブネクサレ、 ドボネクサリ	ホネクサリ	<u>ホネクサリ</u>
19	感謝のあいさつ 「ありがとう」	オーキニ	オーキニ	<u>ダンダン、 メデタシメデタシ</u>	<u>ダンダン、 オーキニ</u>
20	やりきれない	タマラン	モテレン、 コタエン	ヤレン、 <u>タマラン</u>	<u>タマラン</u>
21	飲みながら	ノムノム	ノミナガラ、 ノミノミ	ノミナガラ、 ノムノム	<u>ノムノム</u>
22	まないた	バン	キリバン、 マナイタ	マナイタ、 <u>バン</u>	<u>バン、キリバン</u>
23	すりこぎ	レンギ	スリコギ	スリコギ、 <u>レンギ</u>	<u>レンギ</u>
24	夫婦	ミョート、 ミョートバリ、 フーフ	メオト、 メオトバリ	<u>ミョート、 フーフ</u>	<u>ミョート</u>
25	とかげ	トカゲ、トカキリ	トカゲ、 カベチョロ	トカゲ、 <u>トカキリ</u>	<u>トカキリ</u>
26	(雪が)降っている <存在態>	フッチョル、 フッチョン	ツモッチョン	<u>フッチョル</u>	<u>フッチョル</u>

単純に減少しているように見えるが、実際のところは、その一部が1981年あるいは2017年までに習得した語、または再び使うようになった語なのである。調査の結果、高い割合ではないものの「上の世代の方言習得」があったことがわかった。

6.4. その他の変化について

ここまで、話者Aの変化を共通語化と老年層語彙化という2方向で見てきた。しかし、これらの変化は変化全体の約半数に過ぎない。残り半数の変化した項目を見ると、方言語形のまま一部に発音の変化が起きたものと、別の方言語形に変化したものが見られる。たとえば、「しないでも」は、1961年の少年層時にシェンデモ、1981年にセンデモ・センタチ、2017年にセンデモ、1961年の老年層は、シェンジェモであった。シェからセ、ジェからデへと発音は変化したが、「しない」のセンは方言形のままである。

また、「しんどい」を1961年少年層時にはナンギヤ・コーエー、1981年にはコエー・ダレタ、2017年にはダーイーと答えている。1961年の老年層はナンギジャ・コーエーと答えている。ダイー（ダレタは過去形⁶⁾）は、大分方言で広く使われる「疲れて力がない」の意味であり、この影響を受けたかと思われる。「よく働く人」は、1961年少年層時にホネキリ、1981年にはハリコムヒト・ヨーギンバル、2017年にはハリコミテであった。1961年老年層はハタラキモン・ホネキリと答えている。ハリコミテのハリコムは、大分インフォメーションハウス（2014）に「精を出す」の意味で使われるとある。「分家」は、1961年には回答なし、1981年にワカサレ、2017年にインキョ、1961年老年層はワカサレであるから、1981年に老年層の語彙を獲得したが、2017年にはインキョに変化している。ちなみに2018年に調査した話者Bは、「しないでも」はセンデモ、「しんどい」はダレタ、「よく働く人」はハリコミテ・ホネキリモン、「分家」はワカサレであった。話者Bは上の世代との密な交流があったという。

前述の「分家」の意味で使われるインキョについてなどは、変化語形がどの地域の方言と関係が深いかということも明らかにしなければならないが、それはまた別稿を用意して明らかにしたい。

6.5. 「方言の動態」との比較

広島大学方言研究会（1981）の「方言の動態」には、姫島村7地点の少年層・中年層・老年層合計15名の追跡調査結果がまとめられている。「考察」ではLASの少年層と老年層とを比較して、回答語数が少年層に向かって増加しているのか否かを矢印の上下平で示し、同じ項目が20年後に同じ年層では増加したのか否かを矢印の上下平で示しながら解説している。以下にその一部を引用する。

『瀬戸内海言語図巻』の時点で認められた、増加への徴しを見せる年層差と、20年を経て実際に認められる変化との相関性は、減少へと向う変化に認められる相関性に比べて、低いと言える。特に少年層においては、『瀬戸内海言語図巻』の時点で認められた増加への動きとは逆に、今回の調査において減少している事象の多いことに注目される。（ママ）とあるように、見かけ上の経年変化から予測した増減現象が、特に増加については実際に起こった率が低いことが述べられている。

また、結論として、「その後20年を経て実現している変化の方向と、ある程度相関していると言える。しかし、両者の関係は完全には一致していない。」とし、「その変化の要因を、変化の内実そのものと、周辺地域の方言、あるいは共通語との関わりとの両面から探っていく作業」が必要としながらも、今後の課題としている。おそらくこの課題を解決するためには、広域・大量の追跡調査データが出揃う必要があると思われる。

7. 結論と課題

同一人の3度にわたる方言調査結果を比較することができ、その結果、56年間に調査対象項目の約54%が変化したことがわかった。実際の変化率と見かけ上の変化率を比べたところ、実際が約6%上回る結果となった。数値上は、見かけ上の変化が全般的な外れとは言えないことを表している。しかし、その変化は単純な共通語化ではなく、1961年からの20年間には共通語化と同程度の老年層語彙への変化も起きていた。また1981年から2017年までに、一度変化した語が再び少年層の語に戻る現象もあることがわかった。つまり、当該地域のLAS少年層の使用語彙はひたすらに共通語化したわけではなく、また、一度共通語化したら、もう方言化することはないというルールも導けないことがわかった。

岡野(1999)では、異なる県に所在する下関市と北九州市の方言事象の世代差を詳細に見ながら、「推移状況は単純ではない」と述べている。と同時に「両域方言は一体化する傾向を見せている」とも指摘している。本研究でも、大分県の北部や中部の方言との一体化を視野に入れつつ分析を続けたい。

今後は、どのような分野が共通語化、あるいは「上の世代の方言習得」しやすいのかなど、瀬戸内海の他地域の結果と研究成果を参考にしつつ追究していきたい。

【謝辞】

本稿は、2018年7月24日にリトアニアで行われたIXth CONGRESS OF THE INTERNATIONAL SOCIETY FOR DIALECTOLOGY AND GEOLINGUISTICS (第9回国際言語地理学会)、23-27 July 2018, Vilnius, Lithuaniaにおいて、Study of language change by follow-up survey of “The Linguistic Atlas of the Seto Inland Sea” (LAS) (『瀬戸内海言語図巻(LAS)』の言語変化追跡調査研究 共同発表者：岩城裕之・松田美香・塩川奈々美・友定賢治)として発表した担当内容に修正・加筆したものである。また、本研究は課題番号17H02340(代表：友定賢治)の助成を受けている。

調査・発表に関して、多くの方々の御協力や御厚意をいただきました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

【注】

- 1 松田(1991) pp.33-39より。
- 2 藤原与一・広島方言研究所(1976)「第二部 資料と言語地図 第三章『瀬戸内海言語図巻』のための資料 調査」の三、「調査対象地域の調査地点」p.298より。
- 3 他の方言調査では、男性のみを対象にしたものもある。
- 4 姫島村内の金地区出身の女性にも同席してもらい調査したが、その資料は今回扱わない。
- 5 アエタはアユルの過去形なので、同語と判断した。
- 6 大分県総務部総務課(1991)では「だるし→だるい」の由来が書かれている。p.446より。

【参考文献】

大分県総務部総務課編(1991)『大分県史 方言篇』大分県

- おおいたインフォメーションハウス編 (2014)『大分方言語録』大分合同新聞社
 岡野信子 (1999)「関門域の方言 -『下関市北九州市言語地図』に読む-」室山敏昭・藤原与一編『瀬戸内海圏 環境言語学』武蔵野書院
 広島大学方言研究会編 (1981)『大分県姫島方言の研究 -第二部文法・語彙 方言の動態』広島大学方言研究会会報第29号 広島大学方言研究会
 藤原与一・広島方言研究所 (1974)『瀬戸内海言語図巻』上巻・下巻 東京大学出版会
 藤原与一・広島方言研究所 (1976)『瀬戸内海地域方言の方言地理学的研究 -「瀬戸内海方言図巻」付録説明書』東京大学出版会
 松田正義 (1991)「第一章 第二節 方言区画 - 大分県方言の区画」大分県総務部総務課『大分県史 方言篇』
 室山敏昭・藤原与一編 (1999)『瀬戸内海圏 環境言語学』武蔵野書院

別表 同一話者への56年間で3回の方言調査(1961, 1981, 2017年)結果一覧

LAS:『瀬戸内海言語図巻』, N.A.:無回答, 太字:少年層と同じ回答, (共)共通語化

質問番号	LAS 地図番号	質問項目	1961年 少年層時回答	1981年 中年層時回答	2017年 今回(老年層)	1961年 老年層の回答
1	(4)	一日おき	ヒーテゴシ	ヒーテオキ	ヒーテオキ	N.A.
2-①	(8)	平らな①	ローキー	ヒラクテ、 ローキー	ローキー	ドーキー
3	(10)	恐ろしい	オーデー	オデー	オーデー	オーデー
4-①	(12)	潮が満ちきって 流れのとまった 状態①	マンチョー	N.A.	マンチョー(共)	タテ
5	(15)	にわか雨	ニワカアメ、 ヨードチ	ニワカアメ、 ヨダチ	ソバエ	ニワカアメ、 ヨードチアメ
6	(16)	雷	カミナリ	カミナリ	ヨードチ、 カミナリ	ヨードチ
7	(18)	日照り雨	キツネノシュー ゲン	キツネガヨメ イリ、ヒアメ、 テンキアメ(共)	キツネノヨメ イリ(共)	キツネノシュー ゲン
8	(25)	よく働く人	ホネキリ	ハリコムヒト、 ヨーギンバル	ハリコミテ	ハタラキモン、 ホネキリ
9-①	(26)	そんなに①	ソゲー	ソゲー	ソゲー	ソゲー
10	(18)	しんどい	ナンギヤ、コー エー	コエー、ダレタ	ダーイー	ナンギジャ、 コーエー
11	(30)	怠け者	ヤクナシ、 ホネクサリ、 ドボネクサリ	ドブネクサレ、 ドボネクサリ	ホネクサリ	ホネクサリ
12-①	(32)	儉約する①	シンボースル	シンボースル、 シンボーシャ	シンボースル	シマツースル
13	(35)	内証金	ヘソクリ	ヘソクリ、 ナイショギン	ヘソクリ、 ナイショガネ	N.A.
14	(36)	おてんば娘	テンバ	テンバメロー、 カンチョラ、 ツラガリ	テンバメロ	チェンバメロ

LAS:『瀬戸内海言語図巻』, N.A.: 無回答, 太字: 少年層と同じ回答, (共) 共通語化

質問 番号	LAS 地図番号	質問項目	1961年 少年層時回答	1981年 中年層時回答	2017年 今回 (老年層)	1961年 老年層の回答
15	(37)	おしろい	N.A.	オシロイ (共)	オシロイ	オシロイ
16	(38)	からかう	シェガウ	セガウ、 イラパカス	セガウ	カモー
17	(39)	そしたら	ホタラ	ホタラ	ホタラ	ホタラ
18-①	(40)	するな①	スンナ	スンナ	スルナエ	スンナ
19-②	(41)	あかん②(「そんなことをしたらダメ」のダメ)	ワリー、 ツマラン	ツマラン	ツマラン	ワーリー
20	(43)	親戚	オヤコ	オヤコ	オヤコ	オヤコ
21	(45)	末っ子	スソゴ	オトンボ	オトンボ	スソゴ、シリゴ
22	(47)	うらやましい	ハガイー	イカミー	ウラヤマシー (共)	イカミー
23-①	(51)	感謝のあいさつ ①	オーキニ	オーキニ	オーキニ	ダندان、 オーキニ
23-②	(51)	感謝のあいさつ ②「ありがとう」 相当語	オーキニ	オーキニ	ダندان、 メデタシメデ タシ	ダندان、 オーキニ
24	(52)	夜遅くまで起きて いて寝ない子	N.A.	ヨズク	N.A.	N.A.
25-①	(53)	寝よう①	ネロカ	ネルカー (共)	モー ネロー、 モーネルカエ	ネロカ
26	(55)	うたたね	ウタタネ	ウタタネ	ウタタネ	ウタタネ
27	(56)	いびきをかく	イビキオカク	イビキオカク	イビキオカク	イビキオカク
28	(57)	くすぐる	コソブル	コソブル	コソグル	コソブル
29	(58)	くすぐったい	コソバイ	コソバイ	コソバイー	コソバイ
30	(59)	歯が痛い	言わない	言わない	ハガ ウズク (共)	言わない
31	(60)	どんな	ドケナ、ドイナ	ドゲナ	ドゲカエ	ドイナ
32-②	(61)	あんじょう② (「良く治療して もらう」の「良 く」)	ヨー	ヨー	ヨー	ヨー
33	(62)	夜、隣の家を 食事時に訪れて のあいさつ	オゴメン	ゴメンシモタカ エー、 タバタカエ、 オゴメン	タバタカエ	オゴッソナ、 タバオルカエ
34	(68)	田畑からの帰り 道でのあいさつ	カイローエ	ハリコミヨン ナー、 セワシーカエー、 モーケヨンカ エー	モー カエロー エー、 モー カエラン カエー	カイローエ、 カイローヤ

LAS : 『瀬戸内海言語図巻』, N.A. : 無回答, 太字 : 少年層と同じ回答, (共) 共通語化

質問 番号	LAS 地図番号	質問項目	1961年 少年層時回答	1981年 中年層時回答	2017年 今回 (老年層)	1961年 老年層の回答
35-42	(70)- (84)	文末詞の形式 各種	言わない	言わない	言わない	言わない
43	(87)	下さい①	オクレ	オクレー	オクレ	オクレ
44-①	(90)	ナラ①	言わない	言わない	ドケ イカエ?	言わない
45	(92)	エ	言わない	エ	言わない	言わない
46	(94)	ナー、ノー、 ネー、ニー	ナー、ノー	ナー、ノー、 ネー (共)	ナー、ノー	ナー、ノー
47-49	(96)- (102)	文末詞の各種	言わない	言わない	言わない	言わない
50-①	(107)	やりきれない①	タマラン	モテレン、 コタエン	ヤレン、 タマラン	タマラン
51	(109)	しめた!	ヤッタ	ヤッタ	ヤッタ	ヤッタ
52-54	(110)- (112)	動詞など	言わない	言わない	言わない	言わない
55-①	(114)	見ラン	言う	言う	言う	言う
56-①	(114)	見レ	言う	言う	昔言った	言わない
57	(116)	行かせる	イカスル	イカスン	イカセル (共)	イカスル
58-①	(117)	そうだ (伝聞) ①	チ	N.A.	オキワ シケチヨ ル	チュー
59	(118)	聞かなかった	キカンカッタ、 キカンヤッタ	キカンヤッタ、 キーチョランヤ ッタ	キカンカッタ	キカンジャッタ
60	(119)	よう食いはす まい	タバキラメー	クヤセンヨー、 クヤセンガー	クワンヤロー	イキメー
61	(120)	行つろう	言わない	言わない	言わない	言わない
62	(121)	休まねばならぬ	ヨカワンナラン	ヤスマニヤナ ラン	ヨカワンナ ダメデ、 ヨカワンナ コ マル、 ヨカワンナ ナ ラン	ヨコワニヤナ ラン
63-①	(122)	歩かなければ①	アルカンナ	アルカナ	アルカンナ	アルカニヤ
64-①	(124)	きれいであつた ①	ウツクシカッタ	イカッタ、 ウツクシカッタ	ウツクシカッタ	ウツクシカッタ
65	(125)	飲んだ	ノンダ	ノーダ、ノンダ	言う (ノーダ)、 ノンダ (年上)	ノーダ
66-①	(126)	飲みながら①	ノムノム	ノミナガラ (共)、 ノミノミ	ノミナガラ、 ノムノム	ノムノム
67	(130)	しないでも	シェンデモ	センデモ、 センタチ	センデモ	シェンジェモ

LAS : 『瀬戸内海言語図巻』, N.A. : 無回答, 太字 : 少年層と同じ回答, (共) 共通語化

質問 番号	LAS 地図番号	質問項目	1961年 少年層時回答	1981年 中年層時回答	2017年 今回 (高年層)	1961年 老年層の回答
68	(131)	言わずに	ユワント、 ユワンデ	イワント、 イワンデ	イワンデ	ユワンジェ
69	(132)	あげるから	ヤルホデ、 ヤルデー	ヤルデ	ヤルカラ (共)	ヤルキナリ、 ヤルホデ、 アグルオイデ
70-①	(134)	行きがけに①	イキガキニ、 イキガキ	イキガキ	イキガケニ (共)	イキガキニ
71	(135)	雨ばかり	アメンジョー	アメンジョー	アメンジョ、 アメバッカシ	アメンジョー
72	(136)	これしか	コリシカ	コンシカ	コレシカ (共)	コロールハッチャ、 コンダケハッ チャ
73-①	(137)	白粉など①	オシロイナンカ	オシロイナンカ	オシロイナンカ	オシロイナンノ
74	(138)	500円 (十円) ほど	十円ガン、 十円ガノ	十円ガン	500円ガン	十円ガン
75-①	(139)	一つずつ①	イッコズツ	ヒトツズツ (共)、 ヒトツアテ	イッコズツ	ヒトンズツ
76-②	(140)	どこかに②	ドッカニ	ドッカニ	ドッカニ	ドッカ
77	(141)	皮ごと	カワママ、 カワナリ	カワナリ、 カワママ	カワンマンマ	カワナリ、 カワナガリ
78-①	(142)	鳥を①	トリヨ	トリオ (共)、 トリヨ	トリオ、 トリヨー	トリヨ
79	(143)	人というものは	ヒトユーモンワ、 ヒトチューモンワ	ヒトナンカ (共)	ヒトツチュー モンワ	ニンゲンチュモ ナー
80	(144)	汝 (良い)	アンタ	アンタ	アンタ	オンシ
80	(144)	汝 (悪い)	オシ	オシ、オンシ	アンタ (共)、 オンシ、 オンシャ	ワ
81	(145)	私 (良い) ①	アシ	アシ	アシ、アタシ (共)	オリ
82-①	(146)	みせびらかす①	ミシエビラカス	ミセズラカス	ミセビラカス (共)	ミシエビラカス
83	(148)	いいえ (対目上 の人)	イーエ	シーニヤ	イーエ (共)	イーエ
84	(148)	いいえ (対目下 の人)	イーエ	シーニヤ	イーヤ	イーエ
85	(150)	長い	ナーゲ	ナーゲ	ナーゲ	ナーゲ
86	(152)	いたどり	N.A.	N.A.	N.A.	N.A.
87	(153)	甘藷	イモ	イモ	サツマイモ (共)、 イモ	イモ
88	(154)	馬鈴薯	ジャガイモ	コーボイモ、 ジャガイモ	ジャガイモ (共)	ジャガイモ
89	(155)	南瓜	カボチャ	ボーブラ	カボチャ (共)、 ボーブラ	ボーブラ

LAS : 『瀬戸内海言語図巻』, N.A. : 無回答, 太字 : 少年層と同じ回答, (共) 共通語化

質問 番号	LAS 地図番号	質問項目	1961年 少年層時回答	1981年 中年層時回答	2017年 今回 (老年層)	1961年 老年層の回答
90	(156)	植物の自生	N.A.	オノレバエ	ノラバエ	N.A.
91	(157)	西瓜	スイカ	スイカ	スイカ	スイカ
92	(159)	とうもろこし	トーモロコシ	トーキビ、 トーモロコシ	トーモロコシ (共)	トーキビ
93	(161)	便所	ベンジョ	ベンジョ、 シェンチン	トイレ (共)、 ベンジョ、 セッチン	ベンジョ、 シェンチン
94-①	(162)	出して①	ダシチョコレ	デーチ	ダシテクレ (共)、 ダシチョコレ	ダヒチェックター、 デーチクター
95	(163)	井戸	イノコ、イド	イノコ、 イノコバタ	イノコ、 イド (共)	イド、イノコ
96	(165)	まないた	バン	キリバン、 マナイタ (共)	マナイタ、バン	バン キリバン
97	(166)	すりこぎ	レンギ	スリコギ (共)	スリコギ、 レンギ	レンギ
98	(168)	鏡	カガミ	カガミ	カガミ	カガミ
99	(169)	ろうそく	ローソク	ローソク	ローソク	ドーソク
100	(170)	布・綿などの 焼けるにおい	コゲクシェー	キナクシェー、 カダ	キナクセー (共)	キジネクシェー
101	(171)	火事	カジ	カジ	カジ、ボヤ	カジ
102-①	(172)	意外なものを 発見した時の ことば①	オヨーイ	オッ、オラッ、 オヨッ	ワー、アリヤー	N.A.
103-①	(173)	火事だ①	カジヤー	カジヤ	カジヤ	カジジャ
104	(174)	驚く	タマガル	タマガッタ、 ケタマガッタ、 オデーノー	タマガッタ	タマガル
105-①	(175)	あわてる① (火事の時右往 左往すること)	アワツン	イロトク	タマガッテナ ドゲシテイー カワカラ ン カッタ	アワツル
105-②	(175)	あわてる②のこ とを何と言うか	アワツン	イロトク	アワテル (共)	アワツル
106	(176)	叫ぶ	オラブ	オラブ	オラブ	オラブ
107	(180)	正座する	スワル	オキツスル、 セイザ (共) オ シチョン	セーザオ スル (共)	スワル、イトル
108	(181)	夫婦	ミョート、 ミョートバリ、 フーフ	メオト (共)、 メオトバリ	ミョート、 フーフ (共)	ミョート

LAS : 『瀬戸内海言語図巻』, N.A. : 無回答, 太字 : 少年層と同じ回答, (共) 共通語化

質問 番号	LAS 地図番号	質問項目	1961年 少年層時回答	1981年 中年層時回答	2017年 今回 (高年層)	1961年 老年層の回答
109	(182)	嫁が勝手に里に 帰ること	N.A.	サラカムル	サトガエリスル (共)	サラカムル
110	(183)	分家	N.A.	ワカサレ	インキョ	ワカサレ
111	(184)	かくれんぼ	カクレンボ	カクレンボ	カクレンボ	カクレンボ
112	(185)	走り競争	ランニング	ハシリクラベ (共)	カケッコ (共)	ハシリクラボ
113-①	(187)	遊び仲間に入れ る①	カツル	カツル、 カテル	カテル	カツル
114	(188)	なぐる	ウツ、ブツ	シバク、コズク	シバク、 ナグル (共)	ブツ、ウツ
115	(190)	行き (命令表現 法) ①	イキ	言わない	言う (イキー)	言わない
116	(192)	肩車	ビンビキ	ビンビキ	ビンビキ	ビンビキ
117	(193)	凧	タコ	タコ	タコアゲ (共)	タコ
118	(195)	山の頂上	テッペン	テッペン、 チョージョー (共)	テッペン	ツジ
119	(196)	やっと	ヨーヤク	ヤット、 ズンドコンド	ヨーヤク (共)、 ヨーヨー	ヤット、 エンヤラヤット
120	(197)	にぎりめし	オニギリ、 ニギリメシ	ニギリメシ	ニギリメシ	ニギリゴハン、 ニギリメシ
121	(200)	渦	ウズ	ウズ	ウズマキ	ウズ
122	(201)	船首	サキ	オモテ (共)	オモテ	オモテ
123	(202)	船尾	ウシロ	トモ (共)	トモ	トモ
124	(203)	つばめ	ツバメ	ツバメ、 ツバクロ	ツバメ、 ツバクロ	ツバメ
125	(204)	かたつむり	カタツムリ、 デンデンムシ	カタズムリ、 デンデンムシ	カタツムリ (共)、 デンデンムシ	カタツモリ、 ジェンジェン ムシ
126	(205)	あり	イヤリ	イヤリ	イアリ、 アリ (共)	イヤリ
127	(206)	とかげ	トカゲ、 トカキリ	トカゲ、 カベチョロ	トカゲ、 トカキリ	トカキリ
128	(208)	かまきり	カマキリ	カマキリ	カマキリ	カマキリ、 オガメ
129	(209)	めだか	メダカ、 シューマ	メダカ (共)	メダカ、セーマ	シューマ
130-①	(210)	たくさん①	イッペ	フテコツ	ドッサリ (共)、 イッペー	ヨーキ
131	(217)	かご	カゴ	カゴ	カゴ	カゴ
132-①	(220)	落ちる①	オツル、 オツン	アエタ	アユル	アユル、オツル

LAS : 『瀬戸内海言語図巻』, N.A. : 無回答, 太字 : 少年層と同じ回答, (共) 共通語化

質問 番号	LAS 地図番号	質問項目	1961年 少年層時回答	1981年 中年層時回答	2017年 今回 (高年層)	1961年 老年層の回答
133	(221)	自然に	ヒトリデ	シランマニ	シゼンニ (共)	ヒトーイジェ
134	(222)	もうちよつとで 落ちよつた	オチオッタ	言わない	アー モーチット デ オチヨッタ	言わない
135	(224)	松かさ	マツカサ	マツカサ、 マツボックリ (共)	マツカサ、 マツボックリ	マツカサ
136-①	(225)	雪が降っている (進行態) ①	フリオル	フリヨン	フリヨル	フリオル
137-①	(226)	雪が降っている (存在態) ①	フツチョル、 フツチョン	ツモツチョン	フツチョル	フツチョル
138	(227)	突然に	キューニ	ダマシ	ポクト	ダマシー
139	(228)	袖なし	ソデナシ、 チャンチャンコ	ソデナシ、 チャンチャンコ	ソデナシ、 チャンチャンコ	ソジェナシ
140	(233)	舌	ヘタ	ベロ、ヘタ	シタ (共)、ヘタ	ヒタ
141	(234)	手	テ	テ	テー	チェ
142	(235)	ひざ	ツブシ	ツブシ	ツブシ、 ヒザ (共)	ツブシ
143	(236)	かかと	アド	アド、カガト	カガト	アド
144	(237)	嗅ぐ	カダム	カダム、カザメ	カダム	カダム
145-①	(239)	先生・大人①	センセー以外で シェの発音	センセ (共)	センセー	センセー以外で シェの発音
145-②	(239)	先生・大人②	N.A.	オシェ	オトナ (共)	N.A.
146-①	(240)	知りません①	シリマシェン、 シリマセン	シランエー	シランダ、 シリマセン (共)	シリマシェン

(Matsuda Mika · Shiokawa Nanami)